

かぐや姫の贖罪譚

——竹取物語を貫流するもの——

安藤重和

はじめに

竹取物語の末尾近く、かぐや姫昇天に先立って天人が次の如き発言をしている。

かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきをのれがもとに、しばしおはしつる也。罪の限り果てぬればかく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬ事也。

地上の男達の必死の求愛を受けたかぐや姫は、実は、罪を犯したから地上に遣わされたのであること、今天上界へ帰るのはその「罪の限り」果てたからであるということが明らかにされている。そうであるならば、かぐや姫の地上滞在期間は即ちかぐや姫が罪を贖う期間であったということになり、少なくともかぐや姫を竹取物語の主人公と見る限りにおいて、竹取物語即かぐや姫が罪を贖う物語と言いつ換えることが可能になると思われる。

では一体かぐや姫はどのような形で贖罪を成したと言うのであろうか。「姫」としてかじづかれ、男達の必死の求愛を受け、遂には地上最高の権威者たる帝からまで求愛を受けるに到った、一見幸福そのもののかぐや姫の人生のどこに贖罪の要素があるのだろうか。以

下、物語に即してこの問題を考えて行きたく思う。

一、子となり給ふべき人

竹取物語は天人女房譚の間に求婚難題譚を割り込ませて成立した物語であるという言い方はよくなされるが、実はこの二つの説話を接合させることは思いのほかの難事であったという事に我々は気付くべきであろう。何故なら、天人女房譚では天人を最初に発見した男が天人の夫になってしまう話が大部分であり、その場合多数の男性による求婚の話というものが展開する余地がなくなってしまうからである。野口元大氏は、「求婚難題の要素は、もともと羽衣説話でもその結末部分に見られることの多いものであり、羽衣説話になじみやすい性質をもっていた」と言われるが、羽衣説話（天人女房譚）の結末部に見られる難題譚とは、天女と結婚して既に夫となつてしまっている男に対して天女の親が難題を出す話であり、求婚譚の要素がない点において、竹取物語の求婚難題譚とは本質的に異なっている⁽³⁾。

では、竹取物語において、何故、かぐや姫の第一発見者たる竹取翁はかぐや姫の夫にならないのであろうか。発見時のかぐや姫は小

さすぎて結婚の対象とはなり得ないが、わずか三箇月ばかり後には「よき程なる人」に急成長しているのであり、その段階で翁がかぐや姫と夫婦になつてもよかつたのではないか。翁が「老人」であつたという事は決して結婚の可能性をゼロにしてしまふ事にはならぬ。い事は、『日本昔話集成』の「天人女房」の項に、第一発見者の老人が天女と結婚する話が四話収録されている事によつても知られよう。又、翁夫婦には子供がなかつたからかぐや姫を子供として育てたのだとする見解もあるが、仮りに翁夫婦に子供がなかつたとしても（実は子供の有無に關しての言及は物語のどこにも無いのだけれど）それは理由として不十分であろう。姫が「三寸ばかり」の時にはそういう理由も成り立つだろうが、姫が成長して「世界の男、貴なるも賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがな」とに聞きめて、惑ふ段階になつた時、即ち男達を魅了して止まぬ女性としての無類の美質を發散させるに到つた時には、姫の身近かに居て日夜姫の美質を目のあたりにしている翁こそ真先に姫への恋慕に身を焦がしてよいのではないか。血のつながりがない養女養父の關係は、源氏物語における光源氏と紫上の關係を引用するまでもなく妻と夫の關係に容易に変化し得るのであり、かぐや姫はそのような不道德的(?)な変化さえひき起さずにおかない程に美しすぎる女性なのである。

だが、実を言えば、竹取物語冒頭において既に、翁が姫と結婚する道は決定的に閉ざされている。

いまは昔、竹取の翁といふもの有り。野山にまじりて竹を取りつ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あや

しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。こ(籠・子)となり給べき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。翁は「もと光る竹」を發見しただけの段階で既に「あやしが」つてゐる。だからその「竹の中」に「三寸ばかりなる人」を見付けた時には猶一層強烈に「あやしが」つたにちがいない。が、「竹の中」から「人」が出現するというこの異常に過ぎる現象が、実は翁に対してこの「人」を「子」とすべき事を示唆しているのだと「知り」得た時、翁はこの異常現象の裏に超不思議なる意志を感じ取らずにはおられなかつたであろう。それは古代人たる翁にとつて神の意志と等価の侵すべからざるものであつたはずである。故に、かぐや姫が成長後いかに男達を恋に狂わせて止まぬ存在になつたとしても、翁は自分が「親」の枠を超えて姫の「夫」にならうなどは夢想だにしなかつたのである。

これによつて初めて、多数の男達がかぐや姫に言い寄る求婚譚への展開の道が確保されたわけであるが、実を言えば、翁がこの異常現象が意味するものを読み解く為には、「子」の前提として「籠」を思い浮べねばならず、その為には①翁の職業が百姓や木樵りではなく「籠」を作る「竹取」であること、②かぐや姫の出現場所が大木の空洞やうつほ舟ではなく「竹の中」であること、の二要件が同時に満たされねばならなかつた。でなければ「あさごと夕ごとに見る竹」から「籠」を思い浮かべるといふ極めて職業的特殊性を持つた連想は生じようがないのである。

そしてこの二要件は翁にこの言語連想を起こさせさえすればその

後は不要とされ、貧民として特色付けられる竹取の翁はまもなく、節を隔て、よごに金ある竹」を見付けるといふ形で大金持に変身させられ、又源氏物語の総合巻で「この世の契りは竹の中に結びければ、(かぐや姫は)下れる人のことこそは見ゆめれ」と指摘されている如き竹中誕生の下賤さも彼女を「かぐや姫」と呼ぶことによつて程なく雲散霧消させられている。つまり、翁に「籠↓子」の連想を起こさせる為のみの目的でわざわざ設定されたのがこの二要件であつたのである。

何故それほどまでに「籠↓子」の連想を重視するのかと云えば、その連想を第一発見者たる翁に起こさせることこそが天人女房譚と求婚難題譚という本質的には水と油の關係の説話を接合させる為の鍵であつたからに他ならない。このように苦勞して、竹取物語は天人女房譚を變形させ、求婚譚展開の道を確保したのである。

猶、竹取物語と最も密接な關係にある、今昔物語集所載の竹取説話では、「籠↓子」の連想の部分がなまま天人女房譚と求婚難題譚が強引にくつつけられているが、元來は「籠↓子」の連想部分があつたのではないかと思われるふしがある。といふのは冒頭部で

今ハ昔、 天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ。竹ヲ取テ籠ヲ造テ、要スル人ニ与ヘテ其ノ功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ、翁籠ヲ造ラムガ為ニ、篋ニ行キ竹ヲ切ケルニ、篋ノ中ニ一ノ光アリ⁽⁶⁾

と、二度にわたつて「籠」といふ語を明確に繰り返しているのは、「籠↓子」の連想をねらつた表現ではないかと思われるからである。恐らく今昔物語集の編者がこの説話を採録する際、その部分の重要性に気付かぬまま欠落させてしまつたのであろう。

二、結婚拒否の理由

発見されてわずか「三月ばかり」で「よき程なる人」に成長させられたかぐや姫は翁夫婦に愛育されて幸福に過ごすべき子供の期間を一気に短縮され、早速に結婚問題に直面させられることとなる。年老いた翁は姫の結婚を急ぐ。「かぐや姫」といふ名を彼女に付けた時、翁が「おとこはうけきはらず呼び集へて」「三日」間も「うちあげ遊」んだのは、「けうらなる事世にな」きかぐや姫の存在を「世界の男」達に周知させ、姫の為に少しでも良い条件の結婚をさせようと思つたからに他ならない。この結果、「世界の男」達は貴賤共に姫との結婚を必死に求めて狂乱することになるが、肝心の姫は結婚を拒み続けて誰とも結婚しないまま天上へ帰つて行く。結婚拒否の理由は何か。

野口元大氏は「かぐや姫は、月の都の人たる本性上、けつして地上の人間とは結ばれぬ運命を最初から知つてお」つたと言われるが、竹取物語のどこにも天女は人間と結婚できないなどと書かれていないし、又、竹取物語の母体たる天人女房譚とはまさに「天女が人間と結婚する話」なのであるから、そうした説明で割り切れるものかどうか甚だ疑問と言えよう。結婚拒否の理由は竹取物語の内部に探し求められるべきであらう。昇天に先立つて姫が帝に奉つた「御文」に注目しよう。

かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、とりゐてまかりぬれば、くちをししく悲しき事。宮仕へ仕うまつらざるぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。(略)

「宮仕へ」とは帝の妻としての宮仕えであり結婚の意に他ならない。

又、「かくわづらはしき身」とは前文を受けて、「許さぬ迎へまうで来て、とりゐてまか」る身、の意味であることは明らかであろう。つまり、月へ帰らねばならぬ身であるから結婚はしませんでした、というのである。しかも、「老い衰へ給へる」翁さえも一緒に連れ帰る事の許されぬ月への帰還であった。

娘が月への帰還を打ち明けた時点で、翁は悲しみのどん底につき落されてしまった。

此事をなげくに、鬚も白く、腰もかままり、目もただれにけり翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ふには、かた時になむ老になりけると見ゆ。

極限的な悲しみが翁の身体を蝕んでいるのである。そして、かぐや姫が月に帰った後、翁夫婦は全てに絶望し果てて生ける屍と仮してしまつた。

その後、翁・女、血の涙を流して感へど、かひなし。あの書おきし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか命もをしからむ。

たが為にか。何事も用もなし」とて、薬も食はず、やがて起きもあがらで、病み臥せり。

かぐや姫と親子として一緒に暮らせばこうなる他なかつた。かぐや姫と夫婦として一緒に暮らせば、残された夫は翁達に勝るとも劣らぬ悲嘆にくれることにならう。かぐや姫はその事を恐れて結婚を拒んでいたのである。しかも月への帰還は「(翁達に言えば)かならず心惑ひし給はん物ぞ」と嚴重に秘されねばならなかつた。

ここで、かぐや姫は自分が月へ帰らねばならぬ身である事を最初から知っていた事を確かしておこう。かぐや姫が翁から自分が「変化の人」である事を告げられた場面が参考になる。

翁、かぐや姫に言ふやう「我子の佛、変化の人と申しながら、こゝら大ききまで養ひたてまつる志おろかならず。翁の申さん事は聞き給ひてむや」と言へば、かぐや姫「なにごとをか、のたまはん事は、うけたまはらざらむ。変化の物にて侍りけん身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ」と言ふ。

自分が実は翁の子供ではなく「変化の者」であるという重大事を知らされて、この落ちつき払った対応を娘がなし得るのは、「変化の物にて侍りけん身とも知らず」という娘の言とは裏腹に、誰に教えられずとも「変化の物」たる娘は最初からその事を知っていたのではないかと思わざるを得ないだろう。恐らく竹中誕生の段階から既に知っていたのではなからうか。そして恐らく「月への帰還」の件についても同様であつたであろう。娘は翁から結婚を勧められた時、「なむでう、さることか、し侍らん」と拒否した後、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしき事もあるべきを、と思ふばかり也」とその言いわけをするが、これが娘の本心でないことは、「深き心」を証明すべき難題物を求婚者が持参した時に娘は喜ぶどころか困惑している事からも明らかであろう。娘は「深き心」を見たいという口実で解決の極めて困難な難題を提示することによつて実質的には結婚拒否を貫いていくのであるが、何故それほどまでにして娘が結婚を拒むのかという真の理由は示されていない。と言うことは翁達に示すことのできない結婚拒否の本当の理由を娘が持っていたのだと思われ、以前から娘は月へ帰らねばならぬ運命を知っていたものと解されるのである。

三、結婚をすすめる環境

こうして、かぐや姫は結婚拒否の本質的原因たる「月への帰還」の件を、翁達の「心惑ひ」を恐れて口に出し得ぬまま、結婚問題に対処せねばならぬという極めて苦しい立場に当初から立たせられることとなる。更に姫にとって悪い事には彼女の周辺には結婚にプレキをかけるような要素が一つも存在していなかった。

彼女が単に身分賤しい竹取の家の娘であれば男達はあれほど熱心に求婚しなかつたかも知れないが、翁は彼女を発見して以来「よごと」に金ある竹を見つくる事かさなり、結婚問題が発生する頃には「いきほひ猛の者（豪族）に成り」果てており、それに伴って彼女の社会的地位も急上昇して豪族の「姫」君となり、彼女が結婚する為の条件は飛躍的に改善されていた。

が、それよりも何よりも彼女にとつて不幸であつたのは、「かたちけうらなる事世にな」き光り輝く彼女自身の美しさであり、これは「すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする」「色好み」達を決定的に魅きつけてやまぬものであつた。つまり、男達を魅きつけてやまぬ「かたち」と、結婚を拒む「こゝろ」が、絶対矛盾の形で彼女自身の中に両在することになり、ここに、彼女の解き難い苦悩が淵源するのである。

無論、姫の美しさが世間に知られなければ問題はなかつたのだが、姫の「月への帰還」の件など夢にも知らぬ翁は、老い先短い我が身を思い、姫の一日も早い結婚を望んで、前述の如く、姫の命名を機に世の中の男達に姫の存在を宣伝してしまつた。必然的に「世界の男」が貴賤共に姫に求婚してくる。もはや、姫が承知すれば結婚は成立してしまふ。

結婚適令期の彼女に結婚を勧める翁の論理は実に筋が通つており、

それを拒否する為には余程強力な理由付けをせねばならないが、彼女はその理由を口にできない。

四、迫られる結婚

こうなれば、男達の側で結婚を断念してくれるように仕向ける他はない。求婚の当初から見て行こう。

先ず、姫は男達の求婚を完全に無視して相手に一切反応しない戦術に出た。この効果は大きかつた。「貴なるも賤しきも」姫に求婚していたが、まず「賤しき」男が脱落したらしく、求婚者は「あたりをはなれぬ君達」という表現に変わる。「賤しき」男は長期の求婚活動に経済的に耐えられなかつたのであろう。なおも姫は無視を続けた。愛情の「おろかなる」君達は来訪しなくなつた。だが、「その中になほ言ひける」「色好みといはる、五人」がいた。更に姫は無視を続けた。「色好み」達は恋の苦しさに耐えかねて「恋せじの」祈をし、願を立「てたが「思ひやむべくも」なかつた。彼らは自分で自分の恋心をどうしようもないのだ。「さりとも、つひに男あはせざらむやは」と、姫が独身であるというまさにその一点に結婚への望みを托した。

今まで様子を見守つていた翁は愛する姫の将来を思つて、彼女に論理を尽くして結婚を勧める。姫は結婚拒否の真の理由を明かし得ぬまま、「親の給ことを、ひたぶるに辞び申さん事のいとほしさに」結婚話ののつていくことになる。そこで、姫は男の「深き心ざし」を試すという口実で難題を出す、これはあまりにも難しい難題を示すことで男達に嫌気を起こさせるのが真の目的であつた。そしてその計画は見事に成功し、難題を示された男達は「倦んじて皆

帰」ってしまった。

だが、ここで恐らく姫にとつては予想外と思われる事態が出来た。「猶、この女見では、世にあるまじき心地のしければ」五人の男はそれぞれに難題を克服すべく必死の努力を開始したのである。石つくりの皇子の許から「今日なん天竺へ石の鉢とりにかまる」と連絡があった。又、くらしもちの皇子の許からも「玉の枝とりになむまかる」と連絡があった。他の三人からは特に連絡はなかったもののその動静は姫の耳にも入ったであらう。

ここで問題なのは、現在の我々が考えれば絶対に実在するはずのない「仏の御石の鉢」「蓬萊の玉の枝」「火鼠の皮衣」「龍の頸の玉」「燕の子安貝」が、竹取物語の世界においては極限的に入手困難なかたちにおいてはあがあるが、実在するものと設定されていることである。それは難題物を持参された時の姫の反応を見れば明らかである。「仏の御石の鉢」を持って来られた時、姫は「あやしがり」ながらも「光やある」と本物か否かの検分をするのであり、決して頭ごなしに偽物だと決めつけたりしないのである。又、「蓬萊の玉の枝」が持参された時、鍛冶匠達の訴えがあるまではそれを本物だと思ひ込んでいた。又、「火鼠の皮衣」を持参された時、それを燃やさないことには偽物と断定できなかった。何しろ、竹取物語の世界には「龍」が実在するのである。

難題物が世に実在しなければ男達が如何に努力しても入手できるはずはなく、姫は枕を高くして寝ている事もできただろう。だが、それが実在する以上、姫は安心してはいられず、男達が難題の克服に動き出した時点から、万が一彼らが難題物を手したらどうしよう、という一抹の不安に日夜身を苛まれていたはずである。勿論、

難題物入手の可能性は極めて少ないと思つていたではあろうが。

この不安は持参された難題物が偽物だと断定できるまでは晴れない。だから、男達がかぐや姫を恋するあまり偽物を本物と称して持参し結婚を迫った時、彼女は困惑したはずであるが、「仏の御石の鉢」を持参された時は、「光」の有無によつて真偽を簡単に判定する方法を彼女が知つていたから、事は深刻にならなかつた。だが、「蓬萊の玉の枝」の場合事情は全くちがつていた。彼女は難題提示の段階で「東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝をりて給はらん」と、「玉の枝」の形状を具体的に示してしまつていたので、その通りの形状のものを持参されれば真偽の見分けは不可能であつた。こういう致命的な弱みを持つていたためか、くらしもちの皇子が難題の品物を持って上京なさつたという噂を聞いただけで「我は皇子に負けぬべし、と胸うちつぶれ」て、苦悩する。皇子が鍛冶匠に「かぐや姫のたまふやうに違はず作」らせたところの「玉の枝」を、目の前に示された時、姫の苦悩は更に深まり「物も言はで、頼杖をつきて、いみじうなげかしげに思」う他なかつた。偽物と証明できぬ以上、夫を無限の苦悩の中につき落とすことになる結婚を承知せねばならぬ。喜んだ翁は「聞のうち、しつらひなど」して今宵の結婚の準備を始めた。かぐや姫は「暮る、ままに思ひわび」苦悩の極限にいたが、危機一髪のところ鍛冶匠が出現して「玉の枝」が作り物である事を証言してくれた。そこで「わらひさかへ」る姫の有様はそれまでの姫の苦悩の深さを逆照射していよう。これとは対象的に「火鼠の皮衣」の場合真偽の判定は火中に投ずるのみでよく実に簡単であつたが、それでもそれが「めらめらと焼け」るのを確かめ

るまでは彼女が不安を抱いていた事は「なごりなく燃ゆとしりせば
皮衣思ひの外におきて見ましを」の歌から明らかであろう。

「龍の頸の玉」を課された大伴大納言は龍を殺して玉を取ろうとし、散々な目にあつて、「かぐや姫てう大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり」と姫をのしり、結婚など自分の方から返上した。これはかぐや姫の思つうつぽであつたが、この場合とて、大伴大納言が必死になつて龍を探し求めている間は、姫は安心していられなかつたはずである。「燕の子安貝」の場合もいそのかみの中納言が死に物狂いで子安貝の入手を計っている間姫は決して心安らぐことがなかつたであろう。その上、悪いことに中納言は子安貝を取ろうとして大怪我をしてしまった。おまけに中納言は「人聞き」を気にしてますます重態に落ち入つていく。

これをかぐや姫聞きて、とぶらひにやる歌

年をへて浪たちよらぬ住の江の松（待つ）かひなしとききは
まことか

この部分に関し野口元大氏は、「その言うところは、心からのいたわりというには程遠いものであろう。あくまで高い所から相手の失敗を冷笑的に眺めやり、絶望した相手が自己の殻に閉じ籠つてしまつたのを見てとると、同情というよりはからかいの気味をこめて、『どうしたの、私は待つていたのに』と、心にあるわけでもないことを言つてみた、という趣きである」と言われるが、そこまで冷酷な読みができるのであろうか。

かぐや姫が決して冷血な女性ではなかつたことは、例えば、姫が翁達に「月への帰還」の件を打ち明ける場面における召使達の反応からも明らかであろう。

使はる、人々も、年頃ならひて、たち別れなむことを、心はへ、
など貴やかにうつくしかりつる事を見ならひて、恋しからむこ
との耐へがたく、湯水飲まれず、同じ心になげかしがりけり。

かぐや姫に「年頃ならひ」たる「使はる、人々」の立場から姫の「心はへなど貴やかにうつくしかりつる事」が明言されている。召使に對して主人は遠慮をする必要がないので自分の生の姿を晒してしまふ事が多く、その意味で右の引用部は重視されるべきである。ではその姫が何故、待つてもいなかつた子安貝を待つていたかのように歌つたのであろうか。（子安貝を）待つ甲斐無しと（噂に）聞くは誠か、という下の句の「誠か」という疑問表現の裏に世間の噂が「誠」ではないことを期待する姫の心を読み取らねばならない。つまり、一首の意味は、世間では中納言は「病み死」ぬ寸前だから子安貝を待つても甲斐がないと言っているが、それは虚言であつて欲しい、病気を直して貝を探して来て欲しい、の意にならう。即ち、中納言を生き延びさせようとして姫が虚言をついたのであつた。この歌は文字通り「とぶらひ（病氣見舞）にやる歌」であるのだ。

この歌に對して中納言は次のように返歌をする。

かひ（甲斐）はかく有りける物をわびはて、しぬる命を（その
貝で）すくひやはせぬ

難解な歌であるが、上の句で、姫から見舞の歌をもらった事を「甲斐あり」と一応感謝し、下の句で、「かひ（甲斐）」の意味を同音の「貝」に転じ用いて、「わびはて、しぬる命を」何故その貝で（結婚することによつて）救つてくれないのですか、と疑問を呈しているものと解して大過あるまい。「貝」の意味は子安貝の形を思えばよい。つまり、中納言は「わびはて、死ぬる」自分に對して、か

ぐや姫が見舞の歌はくれても結婚の承諾をくれない事に疑問を呈しているであろう。中納言は最後まで姫との結婚を断念できなかったのである。この返歌を書き果てると同時に中納言が「絶え入」ったという事を聞いて姫は「すこしあはれ」と思ったと描かれている。心やさしい姫であるならば何故「いとあはれ」と思わないのかと疑問が出そうである。だが、ここで中納言は、姫から結婚承諾はもらえなかつたけれど、病氣見舞の和歌をもらつて「甲斐はかく有りける物を」と「すこしうれしき」思いで死んでいった。それは姫と結婚してやがて愛別離苦の苦しみに身を焼かれて死んでいくよりはましな死に方ではないか。恐らく姫はそう思つていたのであろう。姫も辛い立場なのである。

五、帝との文通

五人の貴公子の執拗な求婚を拒み通した姫の前に新たな求婚者として絶対権力を握っている帝が登場した。姫は帝を怒らせて自分を諦めさせようとした。勅命により姫の「かたち」を見に来た「なかとみのふさこ」に対し、「御門の召してのたまはん事、かしこしとも思はず」とか「国王の仰ごとを背かば、はや殺し給ひてよかし」と極めて挑戦的な口をきいたのは帝を怒らせるためであつた。この作戦は、一旦成功し、「多くの人殺してける心ぞかし」と帝は姫を諦めた。だが「猶（姫を）思しおほしま」す帝はそれが姫の「たばかり」であると思破り求婚を再開する。「この女もし奉りたるものならば、翁に冠を、などか賜はせざらん」と帝は結婚問題に翁の叙任をからませて来た。それに対して姫は「御官冠つかまつりて、死ぬばかり也」と答える。「死」を盾にとるしかなかつた姫は相

当に追いつめられていると見てよい。だが「死」をもつてまで帝の求婚に抵抗していた姫が、帝の「御狩みゆき」以後、帝と文通をし、「御心をたがひに慰め」合うようになる。文通など姫はどの求婚者ともした事がなかつたのに、何故、帝に対してだけ素直になつたのだろう。

これを姫は帝の権威に靡いたのだと解するならばそれは誤りであろう。又、地上流謫のさびしさに姫が負けたのだと見るのも当らな。次の箇所注目しよう。

（帝が姫を宮中へ連れて行こうとしたので）このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく、くちをしと思して、げにたゞ人にはあらざりけりとおぼして、「さらば御ともにはあていかじ。もとの御かたちとなり給ひぬ。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫もとのかたちに成りぬ。

姫が「きと影にな」つたのは従来通り相変わらず帝に逆らう行動であり、「もとの形に成」つたのは「もとの御かたちとなり給ひぬ」という帝の言葉に従つた始めての素直な行動であるが、その間に帝が「さらば御ともにはあていかじ」という重要な発言を行なっていることに気付かねばならない。帝が姫を「御ともに」「あてい」こつとしたのは姫と結婚しようとしての事であつたから、「御ともにはあていかじ」という言葉は姫との結婚を帝が断念したことを意味する言葉であつた。姫に心引かれながらも帝が結婚を断念したことにより、姫は始めて帝に心を開くことができたのであつた。

姫は帝と「三年ばかり」にわたつて文通を続け、「御心をたがひに慰め」合つた。では、姫にとってこの期間は幸福であつたのであろうか。実は必ずしもそうではなかつた。

昇天直前、姫が帝に宛てた最後の手紙の内容がまさに恋の告白であつた事は、そこに記された「今はとて天の羽衣きるをりぞ君を、あはれと思ひいでける」という歌が端的に示している。いつからか姫の心に帝を慕う心が芽生えていたのである。それなのに姫は文通をするのみであつて再び帝に逢うことはしなかつた。勿論、結婚も拒み通した。月へ帰らねばならない姫は、別れの時の帝の悲しみを深めるようなことをするわけにはいかなかつたのだ。この姫の抑制した行動が決して無意味なものでなかつた事は、姫が月に帰る事を聞かされた帝が、「一目見たまひし御心にだに（姫を）忘れ給はぬに、（翁は）明暮見なれたるかぐや姫をやりては、いかゞ思ふべき」と述べている事からも明らかであろう。

だが、それにしても、この姫の抑制は何と辛い抑制であつたことか。自分の慕う男が自分を求めて必死になつていてくれるのに、自分も理由も示し得ぬままその恋情を拒み続けねばならぬとは。姫の苦しみは帝への最後の手紙の中からも充分に汲み取れるはずである。

六、愛別離苦を見る苦惱

昇天が目前に迫つた「八月十五日ばかり」に、姫は秘し続けて来た「月への帰還」の件を「さのみやは」と翁達に打ち明ける。

さきんも申さむと思ひしかども、かならず心惑ひし給はん物ぞと思ひて、いま、で過し侍りつるなり。（略）さらす（月へ）まかりぬべければ、思しなげかんが悲しき事を、この春より、思ひ歎き侍る也。

姫にとつて翁達の「心惑ひ」「歎き」がどれほど耐え難いものであつたか明らかであろう。昇天の時翁達が「思し歎」くであろうこと

を予想するのみで「この春より」「思ひ歎き」続けていた心やさしい姫であつた。「この春より」というのは歎きが表面化した時期をいうので、胸中の歎きが「さきん」からあつた事は勿論である。

その姫が、昇天を打ち明けた瞬間から、翁達の激烈な悲嘆を目のあたりにせねばならぬのであつた。昇天の場面で愛別離苦の苦惱が凄絶に展開されるが、翁達の悲嘆が深ければ深いほど姫の苦惱は深まるのであつた。又、「親達の顧をいさ、かだに仕うまつらで、まからむ道も安くもあるまじ」「老い衰へ給へるさまを見たてまつらざらむこそ、恋しからめ」「此国に生まれぬるとならば、歎かせたてまつらぬほどまで、侍らで過ぎ別れぬる事、返々本意なくこそおぼえ侍れ」「（翁達を）見捨てたてまつりてまかる、空よりも落ちぬべき心地する」という姫の言葉から、老衰した親を残して去らねばならぬ苦しみに身悶えする姫の心が伝わって来るであろう。最後の最後まで苦惱せねばならぬ姫であつた。

「（翁達が）思しなげかんが（姫にとつて）悲しき事を」「思ひ歎き侍る也」という部分から明らかのように、姫は自分自身の悲しみをではなく、他の人の悲しみを優先して悲しむタイプの人間であつた。この点が重要であつた。もし姫が自分の悲しみを優先させる人であつたなら、昇天時の夫の悲しみなど気にすることなく、最初の求婚者とも結婚していたであろう。

むすび

以上見て来たところで明らか如く、表面的には幸福そうに見えるた姫の地上生活も実は苦惱の連続であつた。姫を発見して後まもなく翁が「金」を見付け続けて大金持になつたので、姫は物質的な苦

しみとは無縁であったが、精神的苦悩が凄かった。必死に言い寄る求婚者達に理由を示し得ぬまま拒まねばならなかった結婚、帝を慕うようになって結婚を承諾し得ぬ苦しみ、この間姫は翁の「心惑ひ」を恐れて「月への帰還」を秘していたため「親」である翁からささ精神的に孤立していた。そして「月への帰還」を打ち明けた瞬間から最も恐れていた翁達の「心惑ひ」を目のあたりに見ねばならない苦しみが始まった。老衰した親を残して去らねばならぬ苦しみが更に苦しみを過重した。

実を言えば、この一連の精神的苦悩を味わうことこそが姫の贖罪行為であった。それは「罪の限界で」た姫を迎えに来た天人が、「物思ひ」をなくすべき、「天の羽衣」を持参せねばならなかったことで明らかに知られよう。第一発見者の翁が姫と結婚しない設定は姫の贖罪譚を狙ったものであった。

従来、竹取物語の読みは、求婚部分重視派と昇天部分重視派に分かれている気味があったが、本稿は求婚部分と昇天部分を貫く主題を見つけようとする試みである。未熟な論であるが、御示教を仰げれば幸いである。

注(1) テキストは阪倉篤義氏校訂、岩波文庫『竹取物語』（岩波書店 昭45・8）を使用。但し、私に漢字・仮名の表記を改めた箇所あり。

(2) 野口元大氏校注、新潮日本古典集成『竹取物語』（新潮社

昭54・5）解説 九二頁

(3) 関敬吾氏著『日本昔話集成』第二部本格昔話の一（角川書店 昭28・4）「天人女房」の項参照。

(4) 注(3)に同じ

(5) 柳田国男氏「竹取翁考」（国語国文 昭9・1）参照。

(6) テキストは山田孝雄氏他校注、日本古典文学大系『今昔物語集五』（岩波書店 昭38・3）を使用。

(7) 注(2)書 一五五頁

(8) 注(2)書 一一一頁

(9) 注(2)書 一四四頁